

有志共立という思想

II. 私立伝染病研究所の興廃

ま え が き

現在の東京大学医科学研究所はもと東京大学伝染病研究所と呼ばれていたことはよく知られている。この東京大学伝染病研究所はもちろん国立であったわけであるが、その前身の大日本私立衛生会（附属）伝染病研究所は私立の研究所であった（大日本私立衛生会というのは国民に公衆衛生思想を普及啓蒙させるためにつくられた一民間組織であった）。

大日本私立衛生会（附属）伝染病研究所（以後、私立伝染病研究所）は、日本全土に蔓延する伝染病に何とか対処するために、また当時ドイツ（の Koch の下）で赫々たる成果をあげていた北里柴三郎に研究の場を与えるためにつくられたものであった。大日本私立衛生会がバックになり福沢諭吉、長与専齋、森村市左衛門らが中心になって有志共立的に創立されたのである（1892）。

この伝染病研究所は数多くの業績を挙げていたにも拘らず、22年後の1914年、政府はとつじょ行政整理、文教統一という名目で、この独立した研究所を文部省、東京大学の管理下に置くことに決定した。この官報の発表は北里所長をはじめ所員にとって晴天の霹靂であった。北里は直ちに所長を辞し、また北島多一、志賀潔、秦佐八郎ら幹部所員もこれに殉じてその職を辞し、研究所をすべてあけ渡したのであった。そして現在の北里研究所を設立したのである。

前報に述べたように、わが慈恵医大もまた、志を同じくする者が相寄り、知恵と力を出し合って、有志共立的につくられた医学校であった。しかもこの私

立伝染病研究所は位置的にも慈恵医大の真隣(現在の芝郵便局, NTT 芝ビルの所)にあり, 所員の何人かはいつも医学生教育にも参加していたのであった。同じような思想で創立された両機関のうち, なぜ一方の伝染病研究所だけが国立大学に移管され, 所員は総辞職までして新しい研究所をつくらねばならなかったのか(またなぜ慈恵医大の方は次々と新しい有志共立的組織をつくり替えながら生存し続けることができたのか), 大変興味深い問題である。

明治期日本の衛生状況

明治期, 日本人の平均寿命は意外に短いものであった。明治3年(1870)の統計によると, 男は24.46歳, 女は28.92歳で, 明治19年になっても男32.75歳, 女33.21歳にすぎなかった。日本人の寿命をここまで短くしたのは, コレラをはじめとする天然痘, 腸チフス, 赤痢, ジフテリアなどの急性伝染病, さらに結核に代表される慢性伝染病による死亡が大きく影響したからであった。とくにコレラの流行は驚くべきもので, 明治の44年間にコレラによる死亡者は37万人にも達していた。明治19年1年間の主要な伝染病の死亡者をもみても, コレラ108,405人, 天然痘18,678人, 腸チフス13,807人, 赤痢6,839人と, コレラが群を抜き, この4つの伝染病だけでも凡そ147,000人になっていた。同年の日本人の総人口は3,850万に過ぎなかったから, この死亡者数は驚くべき数値である(ちなみに激しかった日露戦争の戦傷病死者ですら85,600人であった)。

伝染病の流行とその対策

明治19年8月, 東京では芝の大通りを毎朝のように四斗樽を十数個積んだ荷馬車が列をなして桐ヶ丘の火葬場に向かっていった。その中身は芝の避病院(隔離病院)で亡くなったコレラ患者の死体であった(まわりの人たちはその悪臭に悩まされたという)。当時の避病院では, 医師も不足し, 適切な治療も受けられず, 入院したらほとんどが死ぬしかなかったといわれる。

このような伝染病の流行は, ようやく近代化の歩みをはじめたわが国の衛

生行政にとっては最初にしてしかも厳しい試練であった。その防疫体制をしき最高責任者は内務省衛生局長・長与専斎であった（現在の厚生大臣である）。



長与専斎 (1838-1902)
本文参照。

長与専斎 (1838-1902) は大村藩の藩医の家に生まれた。緒方洪庵の適塾に学び、福沢諭吉の後を継いで塾頭になった。その後、長崎の精得館で Pompe や Mansvelt に学び、明治維新の際には Mansvelt と協力して授業を続け、長崎医学校（精得館が改称）の制度を改めた。1871年（明治4年）岩倉使節団に加わり、欧米の医学教育制度の視察を行い、大きい感銘を受けて帰国した。帰国後、内務省衛生局長に就任し（1882）、わが国の衛生業務全般を取り扱うことになった。ちなみに「衛生」という言葉は長与の考案したものである（慈恵医大とも関係深く、図書館

館の前身・成医会文庫は長与らの設立委員によってつくられたものである。成医会会長、慈恵医大創設者・高木兼寛との親交によるのである）。

政府はコレラの流行に対処するため、明治12年、内務省のなかに中央衛生会という衛生行政審事機関を設けた（この中央衛生会は執行機関ではなかったが、公衆衛生や獣畜衛生について内務大臣をはじめ各省大臣の諮問に応え、また各大臣に建議するためのものであった。衛生に関する法律でこの会の諮問を経ないものはないほどであった）。長与専斎はこの中央衛生会の（明治15年副会長、同23年）会長となり、高木兼寛（海軍軍医総監）、石黒忠恵（陸軍軍医総監）、長谷川泰（済生学舎長、代議士）らの有力なメンバーを擁して大いに活躍した。

しかしコレラに対する防疫は予想以上に困難で、長与自身も認めるように

「予防の趣旨を心得たる医師は少なく、官吏には理屈はあっても勇気がなく、実施の如きはもっぱら勇敢なる警察官に任ずるにあらざれば其の急に応ずること能わず」といった状態であった。しかし警察に任せればやたらに強圧的になり、庶民はただ警察官を恐れるばかりで、伝染病を隠すようにさえなっていた。

患家にサーベルをさして警官がやってくるとなると、民衆は権力にたいして不審・反感を抱き、警官との間に対立・抗争がおきるのは当然であった。民衆はコレラそのものよりも、消毒・隔離の名のもとに有無を言わず家のすみずみまで踏み込んでくる警察官の方を忌み嫌った。

「いやだいやだよ　じゅんさはいやだ　じゅんさコレラの先走り　チョイトチョイト」。これは明治15年ころはやったチョイト節の一節であるが、子供らが大量でチョイトチョイトと手招きしながら歌い歩いたという。強制隔離にたいする民衆の恨みの現れであった。

大日本私立衛生会の結成

このような状況に対してまず必要なことは民衆にたいする啓蒙であった。大日本私立衛生会（私立衛生会と略）はこの啓蒙運動のために結成された（1883（明治16）年）。その目的とするところは「全国民の健康を保持促進する方法を討議講明し、一には衛生上の知識を普及し、一には衛生上の施政を翼賛する」ことであった。会頭は佐野常民（適塾出身。日本赤十字社の創設者）、副会頭・長与専斎、幹事・高木兼寛、長谷川泰、石黒忠恵、三宅秀（東大医学部長）、後藤新平（後の内務省衛生局長）、永井久一郎（内務省衛生局員、永井荷風の実父）らであった。

私立衛生会の発会式で副会頭・長与専斎はこのように述べている。「世界万国衛生法ノ最モ能ク實際ニ行キ届キタルハ英国ヲ以テ第一トナスコト欧米諸国ノ許ス所ナリ。是他ナシ。衛生ノ私会随所ニ起コリテ人民ノ自愛ノ思想上下ニ普ク。…他事ハ知ラズ、衛生ノ事ニ限りテハ、人民ニ其ノ心ナクテハ如何ナル善美ノ法律アリトモ、到底其ノ成績ヲ収ムルコト能ワザルハ断ジテ疑ウベカラザルコトナリ。故ニ余ハ公衆ニ衛生ノ思想ヲ普及セシムルヲ以テ大

日本私立衛生会ノ一大要旨ナリト信ズ」と、衛生事業を遂行するには民間側の理解と自愛の精神が最重要であることを繰り返し強調したのである。

私立衛生会が組織された背景には、このような民衆を疎外しては公衆衛生の向上は一步も在りえないとする政府の認識と、衛生思想の向上を切に願う民間側の強い意欲とがあったのである(私立衛生会は「私立」と修飾してあるが、それは今日の財団法人のようなものであった)。そして会の啓蒙活動の一つは「大日本私立衛生会雑誌」を発行し、衛生思想を大いに普及することであった(高木兼寛も英国で学んできた公衆衛生に関する知識を数多くの論文として発表している)。

長与専斎の治療研究所構想

明治政府はわが国の医学の範をドイツに採ったため(1869)、当時唯一の国立医学校であった東京医学校(東京大学医学部の前身。学校名がしばしば代わるので、以後東大医学部ないし単に東京大学に統一する)では、多くのドイツ人教師が教鞭をとることになった。しかし暫くすると、ドイツに留学して帰国したこの学校の卒業生が次々と教授になったため、1886年(明治19年)ころからはすっかり日本人教授によって入れ替わられた。政府はまた、人材養成を専らこの東大医学部に依存して、その卒業生を他の医学校に派遣するという方針をとったため、この大学は次第にわが国の医学教育全体を支配、独占するかたちになった。

高木兼寛の脚気の治療研究

明治に入って全国に蔓延する難病の一つに(伝染病を除いて)脚気があった。わが国特有の病気であったため、わが国医学者にとって、これに対する予防、治療の研究はきわめて重要であった。そしてこれに成功したのは実に海軍軍医・高木兼寛(1849-1920)であった。彼はセント・トーマス病院医学校で英国医学を学び、十分疫学的知識を習得して帰国したばかりであった。

多くの疫学的研究から、彼は脚気の原因が食物成分の配合の欠陥にあるこ

とを明らかにした。海軍の練習艦をつかった壮大な航海実験で、彼のつくった改善食が脚気を完全に予防し、また治療することを実証したのである(1884年)。そしてこの実証から今日の脚気のビタミン学説が生まれてくるのである。

この高木のいわゆる「脚気栄養欠陥説」に対して、東京大学の研究者たちはこぞって反対した。最初に登場したのは細菌学教授・緒方正規(1853-1919)であった。彼は「患者の血液から特有な菌を発見し、この菌を動物に注射すると脚気特有の症状を発現するので、脚気はこの脚気菌の感染によっておこる伝染病である」と報告した(1885)。

緒方は、肥後国河俣村出身、1880年東大医学部を卒業したのち、ドイツに留学し、Hoffmann, Pettenkofer, Loeffler に衛生学、細菌学を学んで帰国したばかりであった。

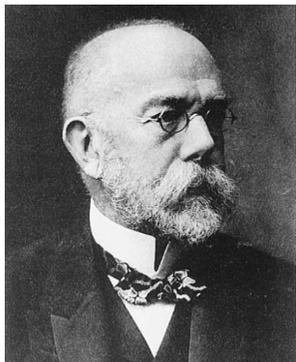
緒方に続いて生理学教授・大沢謙二、内科学教授・青山胤通、三浦謹之助、薬物学教授・林春雄、病理学教授・緒方知三郎らが次々と高木の栄養欠陥説に反論した。論点は少しずつ違うものの、彼らに共通した心情は「東京大学の研究者で分からないことが、どうして他の研究者に分かるか」といった(その後もしばしば顔をだす)権威主義であった。

今日からみて、高木の脚気の予防、治療の研究は脚気を撲滅させ、ビタミンの発見に大きな道を開いたわけであるが、これに対する東京大学の緒方らの激しい反論は、日本におけるビタミン学の誕生と発展に大きな障害になった。このようなこともあって、長与専斎は、医学教育の領域のみならず、医学研究の領域でもこの大学があまりに大きい権威を独占することは危険であ



高木兼寛(1849-1920)

明治大正期の海軍軍医、教育者。英国に留学、1885年海軍軍医総監。1881年(明治14年)成医会講習所(慈恵医大の前身)を設立、翌1882年有志共立東京病院(慈恵医大附属病院の前身)を開設、1885年看護婦教育所(慈恵看護専門学校の前身)を設立し、日本に英国医学およびナイチンゲール式看護教育を導入した。また海軍兵食改善によって脚気撲滅に成功した。



Robert Koch (1843-1910)

明治期に来日したドイツ人細菌学者。炭そ病病原菌の確定、結核菌の発見、コレラ菌の発見を通して近代細菌学に寄与。1905年「結核に関する研究と結核菌の発見」によってノーベル生理学医学賞受賞。

ちどころがないといわれ、また病原細菌学はこの時に始まったともいわれている(1883年8月から翌年5月まで、Kochはエジプト、インドに遠征してコレラ菌を発見している。緒方正規がKochの研究室でLoefflerから細菌学を学んだのは、このKochの遠征中のことであった)。

1890年(明治23年)、遂にKochは結核の治療薬・ツベルクリンを発見したと報告した(第十回国際医学会)。「急性の伝染病に対しては予防が大切だが、結核のような慢性の病気に対しては治療を行うことが必要である。…私はここ数年来、結核の治療薬を探すのに菌の培養から始めてきたが、その際金や銀の塩類は非常に薄い濃度で結核菌の発育を妨げるのに、モルモットを使った生物実験では残念ながら全く無効であった。しかし私は今ようやくモルモットの結核を治せる薬(ツベルクリン)を手に入れることができた。この発見は他の伝染病にも、有効な薬を探す発端になるであろう」というセンセーショナルなものであった(ここに云う結核を治せる薬(ツベルクリン)とは結核

ると考えるに至った。

Kochの結核の治療研究

伝染病研究所の初代所長になる北里柴三郎(1852-1931)は、1886年(明治19年)早々、Koch(1843-1910)の研究室にいた。内務省からの派遣留学生であった。そのころKochは細菌の純粋培養法を確立して、すでに世界的学者になっていた。

Kochが結核の研究を開始したころ、すでにこの病気は人類の最大の脅威になっており、それによる死亡は全死亡の七分の一、成人では三分の一にも達していた。

Kochは間もなく結核菌を発見し、これが結核の病原であることを確立した(1882年3月)。彼の研究方法は現在でもまったく非の打ち

菌のグリセリン抽出液のことであるが、これによるモルモットの治療実験は北里が受けもっていた)。Koch がすでに著名な細菌学者であっただけに、学会出席者に与えた衝撃は極めて大きかった。さらに Koch は「臨床応用についても好成績をえており、初期の結核は私の薬で治せるであろう」と付け加えた。

日本でもこの Koch の結核治療薬に対する関心はきわめて高く（当時の結核の死亡者数をみればそのことは明らかであろう（表 1））、私立衛生会雑誌にもこれに関する多くの論文、論評が出された。長与専斎にもいくつかの論評があるが、ここには彼の自伝からその感激ぶりを引用する。「近時、結核患者著しく増加するも、適当なる治療法なく、人間の一大厄難として忌み恐れたる折りなれば、ツベルクリンの評判もたちまちに医俗の間に宣伝せられ、新聞、雑誌はもちろん日常の茶飲み話にもなる具合で、あたかも救世主の出現して、不死の薬を授け給えるが如く、一切の肺病は危篤に瀕したる者とてもたちまち回復蘇生するが如くもてはやされぬ。凡そ医事に関することにしてかくの如く全世界の人心をゆるがしたるは、けだし古来未曾有と云うべきなり。…将に医学の新世界に移るの時に遭遭せり、幸福の至り、愉快の至りなり」。

ツベルクリンに対するこのような期待にも拘らず、しかしどうした訳か（あまりにも成果を急ぎすぎたためか）、その後の追試は期待する結果にはならなかった。北里を通じて私立衛生会が取り寄せたツベルクリンでも、何人かの医師が追試したが、一定の効果を得ることはできなかった。東京大学内科学教授・青山胤通

表 1. 1895 年（明治 28 年）の各種伝染病の状況
（資料「医制八十年史」）

	届出患者数	死亡数	致命率**
コレラ	55,144 人	40,154 人	72.8%
赤痢	52,711	12,959	24.6
腸チフス	37,015	8,401	22.7
天然痘	1,284	268	20.9
ジフテリア	6,100	3,025	49.5
結核*	—	66,779	—

* 結核死亡数のみは統計の始まった明治 32 年分

** 致命率=死亡数/患者数×100

(1859-1917) もツベルクリンの効果を断言するには時期尚早であると結論した。

ツベルクリンが脚光をあびている頃、衛生局長・長与は、ドイツに留学中の後藤新平に手紙をだし(1890)、自分は今ツベルクリンによる結核の治療研究所を(北里を中心に)設立しようと考えている。初めは宮内省からの援助をうけ、次には資本家の参加を当てにして、ゆくゆくは私立の病院に引受けさせ、国立の大学(当時は東京大学が唯一)と競争できるほどに充実させて、全国の医学を推進させたい。ただ、大学側から反対意見が出るかも知れないのでこのことは内聞にしておいて欲しい、と書いている。しかし上のようにツベルクリンの評判が次第に悪くなってきたので、長与としては北里が帰国するまで一時保留というかたちにしていたらしい。

後藤新平(1857-1929)については後で述べるように、ドイツ留学で学んだ衛生行政に関する見識で、帰国後よく長与を補佐し、「長与の懐刀」といわれた人物である。のち長与の後任として内務省衛生局長に就任し、伝染病研究所のことで再び北里に関わることになる。ただ、後藤には性格的に、可能だとみるとこれを強行する傾向があり、問題を起こすこともあった。

北里柴三郎の業績

Koch がツベルクリン療法の研究をしていた頃、北里は Koch の研究室で破傷風の免疫の研究に没頭していた。彼は破傷風菌の純粋培養に成功し、その毒素の存在を証明したのち、少量の毒素を動物に繰り返し注射すると、動物は毒素に耐性を示し、致死量の毒素を注射してもよく耐えることを見いだした。さらにこの免疫になった動物の血清は、毒素と混ぜるとこれを解毒し、さらにこの血清は無処理の動物に注射すると破傷風毒素による発病を防ぎ、発病動物に対しては治療効果を示すことを発見した(北里によると、この研究で少量の毒素をくり返し注射したのは、Koch のツベルクリン療法の研究を真似したものであったという)。

同じようなことを同僚の Behring はジフテリア菌について観察していた。この成果は Behring と北里の連名で「動物におけるジフテリアおよび破傷風

免疫の成立」という題名で発表され(1890),これが今日の血清療法の基礎になった。(余談であるが)この業績で北里と Behring の役割は、むしろ北里の方が大きかったと思われるのに、Behring のみがノーベル賞を受賞したのは今もって不可解とされている。

北里が Koch 研究室で研究していた頃、前述のように高木兼寛と緒方正規の論争があったわけであるが、北里は Loeffler の勧めもあり、緒方の「脚気菌」の研究に痛烈な批判(「緒方氏の脚気菌説を読む」)を加えた。北里が学問上で高木と関わりをもったのはこれが初めてであった。緒方に味方する森鷗外(東京大学のスポーツスマン)は、北里に「君は職を重せんとする余り情を忘れて」という感情的な手紙を書いた。北里と緒方との気まずい関係はこれがもとで永く続くことになり、また北里と東京大学との冷たい対立もここから始まったといわれる。

(ここで少し北里の性格に触れる) Koch が上述の国際医学会(ベルリン、1890)で結核の治療研究を発表した頃、北里の名もすでに国際的になっていた。医学会には多くの日本人(留学生)も参加していたが、その懇親会で北里は、有名になったのを鼻にかけ、傲慢不遜、満座を圧倒する勢いであつたらしい。同席した金杉英五郎(1865-1942。後に慈恵医大初代学長)はこれをみて痛烈な反撃を加えた。「先程から君は日本政府の悪口を言い、日本の大学の無能さを馬鹿にして、参会者全員を無視しているが、自分には全く理解できない。このような放言は自分らのような私費留学生ならいざ知らず、いやしくも君のような官費留学生のやるべきことではない。再び同じことが言いたいのなら官費を全部返上してからやりたまえ」と。

北里には、このようなお山の大将的な気分があり、何でも一番にならないと落ち着かないというところがあつたらしい。後に続く東京大学との気まずい対立、抗争もこのような



北里柴三郎(1852-1930)
本文参照。

性分と無関係ではなさそうである。

北里柴三郎 (1852-1930) は、肥後国阿蘇郡小国郷北里村の総庄屋の家に生まれた。熊本医学校に学んだのち、1875年東京医学校 (現東大医学部) に入学、1883年に卒業した。1884年内務省衛生局に勤務したが、翌1885年ドイツ留学を命ぜられ、Kochの研究室 (ベルリン大学衛生学教室) に入った。破傷風菌の純粋培養と毒素の証明、Behringとの共同研究でジフテリアと破傷風の抗毒素を発見、血清療法の基礎を築いた。帰国後の動向は本文参照。

私立伝染病研究所 (私立衛生会附属) の創設

急性伝染病の流行、さらに産業構造の変化にともなって急激に増加した結核を前に、日本の医療行政の責任者、内務省衛生局長・長与専齋は (先述したように)、臨床研究と基礎研究とを一体化したような私立の治療研究所をぜひ創らねばならないと考えていた。

北里柴三郎をとりまく環境

北里は1892年 (明治25年) 5月28日横浜に帰国した。横浜からは汽車で新橋に着いた。新聞は「日本に二大偉人が生まれた。一人は学勲に輝く北里博士、もう一人はシベリア大陸を騎馬横断した勇士福島安正中佐である」と書きたてた。新橋駅は人の波で埋まった。

中央衛生会 (会長・長与専齋) は早速、臨時会議を開き (6月1日)、高木兼寛、長谷川泰、石黒忠憲らの提案によって (北里柴三郎に担当させるべき) 伝染病研究所の設立を決議した。一方、北里は私立衛生会の例会 (6月25日) で講演し、「伝染病研究所設立の必要」を強調した。

しかしその後の状況はそれほど甘いものではなかった。とくに東京大学の北里にたいする態度はきわめて冷たく、北里を中心に据えるこのような研究所の立案は、何れも実現の見込が立ちそうになかった。この冷たい理由の一

つは、先程のべた北里と細菌学教授・緒方正規の敵対関係、つまり緒方の「脚気菌」に対する北里の痛烈な批判であった。緒方の「脚気伝染病説」に同調ないし支持した人々・青山胤通、三浦謹之助、大沢謙二、森鷗外らにとって北里の帰国が快いはずはなかった。

北里の方では、自分ほどすぐれた業績を挙げて帰国した者はいないと自負しているのに、大学の方ではそれほど評価せず、諸手をあげて迎える気持ちなどさらさらなかった。北里の方では、Koch 研究所（1891 年につくられた伝染病研究所。臨床部門と研究部門の両方を Koch の指揮下におく形であった）位の研究所をつくってくれてもよさそうだと思っているのに、大学側では、そのような期待はあまりに過大すぎて問題にならないと考えていた。このギャップは北里の自尊心をますます傷つけ、生来の負けん気にさらに火をつける結果になった。

長与専斎，福沢諭吉，森村市左衛門らによる有志共立的創立

伝染病研究所設立の問題は意外なところから解決の糸口がみつかった。長与はいつものように適塾の先輩であり親友である福沢諭吉（1834-1901）の家をしばしば訪ねていたが、ある時、福沢から例のツベルクリンの問題はその後どうなったのかを尋ねられた。長与は「どうもコッホの発表が少し早すぎたようで、一時センセーションをおこしたが、いまは反動がおこって真価を認めない人がでてきている。しかし実際は値打ちのあるものだ。…」

そのこともあって、コッホの門弟の北里もドイツから帰ってはきたものの、日本では研究の設備もなく、むなしく日を送っているという有り様だ」と答えた。福沢はそれを聞いて「ツベルクリンの前途に望みが無いことでも

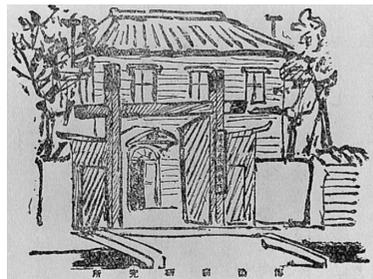


図1. わが国最初の伝染病研究所
ある古老の記憶をもとに描かれたものである。所在場所は芝区芝公園五号三番地。現在の御成門交差点の南東の角で、松下電器産業東京支社の場所に当たる。

なさそうだ。はたして研究の価値があるものなら実に惜しいことだ、自分が一つ助けてみよう。元来、学問研究を助けるのが自分の道楽だ。もしそういう事態にあるなら、自分が研究所を建てようじゃないか。たまたま芝公園の一遇に子供の住居用に借りた借地がある、あそこに小さくてもいいからとにかく研究所をつくろう、そして北里に提供してみよう」と長与に約束したというのである。福沢は医者ではなかったが、適塾で学んだ蘭書はほとんど医書であり、また同門の多くの友人が医者になったため、医学・医療には強い関心があったのである。

こうして福沢は工事を急がせ、建坪10余坪2階建ての上下6室を新築した(1892年11月、図1)。そして心やすい実業家(貿易商)・森村市左衛門を口説き、森村が同研究室の設備、機械類の資金一切を提供するというで話をまとめた。この記念すべき研究所の場所は芝区芝公園五号三番地、現在の御成門交差点の南東の角で、松下電器東京支社の場所に当たる。北里はそこに転居し、結核患者に限っては毎日午前8時から9時まで診療も行なったという。

一方、私立衛生会は、福沢に交渉して、研究上のこと一切を北里に任せるということで、無償で研究所の運営を任された。私立衛生会では向こう一年間一先ず3,600円、すなわち月々300円を支出して、この小さい研究所の運営をすることにした。研究所へは民間からも多くの金品の寄付があったが、最も大口だったのは言うまでもなく先の森村市左衛門からのもので(1,000円)、その他寄付一覧には137円のまとまったものから、モルモット7匹に至るまで記されている(巡査、小学校教員の初任給が8円の頃である)。こうして1892年(明治25年)11月30日、多くの民間の篤志によって有志共立的に創られた研究所は私立衛生会附属として発足することになった。かつて長与がのぞんだ「官立の大学と競争すべき私立の治療研究所」がスタートしたのである。

福沢諭吉(1834-1901)は明治期の啓蒙思想家、教育家。大阪の豊前中津藩蔵屋敷に生まれた。緒方洪庵の適塾に入門、蘭学を学び、のち塾頭となった。1858年、江戸中屋敷に蘭学塾を開くが、蘭学が実際に役立つことを知り、英学に転じた。1860年渡米、ついで1862年渡欧、佛、英、蘭、プロシア、露、ポルトガルの諸国を回った。1866年、塾を芝新銭座に移し慶応義塾と名づけた(その建学の精神は有志共立であったといわれる)。以後、義塾を本拠に教育と著作に多彩な啓蒙活動を展開した。適塾で蘭学を医学書で学んだため、医学に関心が深く、また友人にも長与専斎をはじめ松山棟庵、隈川宗悦、杉田玄端、Simmonsなど医者が多い。



福沢諭吉(1834-1901)
本文参照。

森村市左衛門(1839-1919) 明治大正期の実業家。江戸生まれ。13歳で呉服商店員。戊辰戦争では土佐軍の兵器、糧食の用達を引き受けた。横浜で生糸、羽二重などを外国人に売り巨利を得た。1876年、大倉孫兵衛とともに対米貿易を開き、さらに日露戦争後は取り扱い商品を拡大、本格的商社に成長した。福沢諭吉と親交あり、彼の依頼もあって、北里柴三郎には最後まで面倒をみた。

余談であるが、同氏はまた東京慈恵会の理事として活躍した。そしてその子息・森村開作は渋沢栄一に代って東京慈恵会の副会長をつとめた。



森村市左衛門(1839-1919)
本文参照。

東京大学との補助金獲得あらいそい

同じ頃、文部省（東京大学）もまた東京大学内に伝染病研究室をつくる計画をたてていた。このことはこの私立伝染病研究所のその後の運命をかなり複雑なものにした。私立伝染病研究所にしても恒久的研究所にするためには、政府から長続きする補助金を仰がねばならず、いずれの場合も翌1893年（明治26年）1月の第四回帝国議會を通過せねばならなかった。そしてどちらか一方だけが通過する、二律背反であった。

第四回帝国議會にはこの両議案、すなわち文部省（東京大学）構想の「医科大学伝染病研究室及び病室設備費予算案」と衆議院議員・長谷川泰（私立衛生会幹事）らの「大日本私立衛生会設立伝染病研究所補助費ニ付建議案」が同時に提出された（そして文部省案のものには大学内に研究室と病室を新設、設備するために46,250円を必要とするとしていた）。

長谷川は議會において、北里が文部省構想に強く反対であることを強調しつつ、また長谷川自身予算委員会文部省予算主査である立場を利用して、文部省予算案を潰し、自分らの議員建議案を強引に通過させた。すなわち議員建議案の私立衛生会伝染病研究所補助費を可決成立させ、補助金として創立補助費20,000円と以降（明治26年から）3ケ年間研究所補助として毎年15,000円を同研究所に下付することを通過させたのである（創立費補助というのは、御成門の研究所では手狭であるため、私立衛生会が芝愛宕町の内務省用地に移転新築工事するための費用であった）。議會で長谷川は、「北里ハ文部省所管ノ伝染病研究所ニハ行カナイトイウノデアリマス。カク致シマスト歌舞伎座（東京大学伝染病研究室のこと）ヲ造ツテモ団十郎モ行カズ、菊五郎モ行カナイノデハ千両役者ガイナイトイウコトデアリマス」と云って大見得を切ったといわれる。

これを動機に大学派の北里にたいするライバル意識は一層たかまった。青山胤通、森鷗外らは次々と北里批判をくり返した。ここには紙面の都合で、北島多一（後に伝染病研究所長、慶応義塾医学部長）の自伝から、彼が東京大学を卒業して北里の研究所に入ろうとした時（1894年）、青山胤通学長が云った言葉が載っているのをそれを引用する。「当時の医科大学長（現東大医学部長）で

あった青山先生は私を呼び出され『君は北里のところに行くそうだが、それは君のために非常に不利益だ。君も知っての通り、東大教授はいま北里のことを皆敵のように思っている。僕はそれほどでもないのだが…。君に云うが、君がもし北里のところに行くなら、君と東大との縁は切れるぞ。僕は立場上(学長のこと)君の希望通りにして上げられる。洋行したいのならすぐドイツに留学させられる…。君は特待生だった、しかも一番で卒業した。東大の教授の席は君を待っているのだ。何も外に出て行く必要はないじゃないか。今だったら教授連中は君のことを悪く思っていない。僕のいう通りにしないと君は損だぞ、よく考えろ。北里のところに行くのはよほど損だぞ』と何回もくり返された」というのである。当時の大学側の雰囲気がよく出ている。

私立伝染病研究所の発展と業績

こうして私立伝染病研究所は国庫補助をうけ、芝区愛宕町2丁目の内務省用地に移転した(1894年2月)。その場所は現在の芝郵便局とNTT芝ビルの位置(つまり慈恵医大の隣)に当たり、その構成は図2のように敷地500坪内に2階建本館(72坪), 2階建病室(85坪, 15室), 動物室(32坪, モルモット, サル, イヌ, ニワトリ, ヒツジ, ウマ, ウサギ, ネズミなど飼育), 消毒所(26坪), 解剖室(7坪), 賄所, 浴室などからなり、最新の設備をもつ当

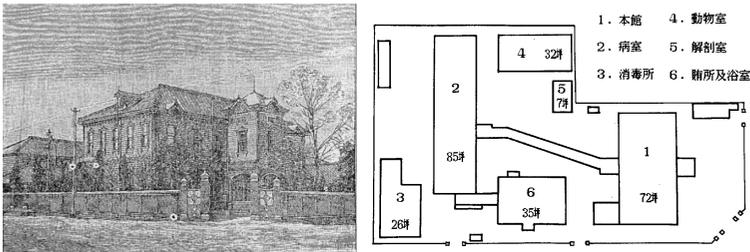


図2. 国庫補助で新築, 移転した伝染病研究所

移転場所は芝区愛宕町二丁目, 現在の芝郵便局とNTT芝ビルの位置に当たる。右は建物の配置図である。12年後再び芝白金台町に引越すが, この愛宕町時代が北里柴三郎の最も充実した時期であったといわれる。



秦佐八郎 (1873-1938)

明治一昭和期の細菌学者。1898年(明治31年)伝染病研究所に入所,北里柴三郎に師事。1903年(明治36年)から慈恵で細菌学の講義を担当。1907年ドイツに留学,Wasserman, Ehrlichらに師事,Ehrlichとともに駆梅剤・サルバルサン(サリド)の創製に成功。1914年(大正3年)北里研究所に移り,1920年慶応大学医学部細菌学教授に就任。写真の左はEhrlich。

時としては堂々たる研究施設であった(Kochの研究所を手本にして設計されたといわれる)。当時の所員は,所長の北里のほか助手9名(含定員外),書記2名,雇員1名の陣容であった。助手の中には石神亨という名もみえる(高木兼寛の恩師・石神良策の婿養子)。彼は当時高木兼寛とともに大学派の脚気伝染病説と論争中であった。

この研究所ができたとき北里は43歳であり,いうならば研究者の絶頂期にあった。当時の研究所の業績をみても,ジフテリア・破傷風血清療法の開発,香港のペスト菌の発見,新潟での恙虫病の研究,コレラ,腸チフス,肺炎,丹毒,連鎖球菌,ペスト,赤痢等各種抗血清の実験,製造など多岐にわたっており,また志賀潔による赤痢菌の発見や梅野信吉による牛痘苗の継代に関する研究など世界に誇りうるものばかりで

あった。

研究所の雰囲気については志賀潔の回想文が残っている。「わが研究所の所員で細菌学会の先達である浅川範彦,遠藤滋,梅野信吉,秦佐八郎らはいずれも大学(東京大学)出身ではない。浅川さん,遠藤さん,秦君は医専程度の学校出であり,梅野さんは獣医学校を卒えただけである。いわゆる秀才コース,学閥街道とは凡そ縁遠いところを自力で踏みのぼりながら世界の細菌学界に登場したのである。それまでの精励を思いみるべきである。同時に学究者としての素質を見抜いて自分の門に迎え,鍛えあげた北里先生の包容力,指導力もまた賛嘆すべきであろう。ともあれ大学出身でない学者が大学教授と肩を並べ,あるいは一足お先に立派な業績を次々と打ち上げていったのは,わが細菌学会の壮観であった。文部省のお役人や大学の先生がたが,北里一門

をなんとなくけむたがったのはこんなところにあったのであろう」。

(小論の論旨とは直接関係ないが慈恵医大との関係について少し述べる)私立伝染病研究所ができたころ、北里はとなりの慈恵医大(その頃は東京慈恵医院医学校)に来校して時々細菌学を講じた(反対に高木兼寛校長は北里所長の招待でこの研究所で医事衛生に関する講義をしている)。また1936年(明治36年)頃からは、秦佐八郎(1873-1938)が細菌学の専任講師として講義を担当していた。秦はその後(明治40年7月)ドイツに留学し、Ehrlichに師事して梅毒の治療薬・サルバルサンを開発した。高木兼寛校長はこの秦の後任として、もとこの研究所の助手であり、その当時はロックフェラー研究所の首席助手をしていた野口英世を招きたいと考えていた。しかし、この話はまともならず、北里はその代わりに愛弟子・綿引朝光を推薦した。慈恵医学校の初代の細菌学教授である(1910)。

北里は、研究所とはべつにツベルクリンの改良研究とその臨床研究のための施設をもとめていた。またまた長与専齋がそのことを福沢諭吉に話したところ、福沢は芝区白金三光町128番地、土筆ヶ岡と呼ばれる所に敷地を用意し、またも森村市左衛門にその建設資金を依頼した。1,000坪余りの土地に結核専門病院・養生園を建て、1893年(明治26年)9月に開院した。ここにも研究室、動物舎を建て、ウマ、ヒツジを飼育して、免疫血清の製造研究を行った。こうして北里の持論「医学の基礎研究と臨床研究の結合」は次々と現実になっていった。

養生園の開院に当たって福沢は「これからはなるべく篤志家の寄付や政府の補助に頼ることなく、この病院を経営して自力で研究をすすめるよう」北里に勧告した。そしてなるべく学問、研究に専念できるように、会計経理の上手な門下生・田端重晟を病院事務の責任者に据えた(田端の経営努力の甲斐あって養生園はまたたく内に大きくなり、大いに蓄財し、後に北里が研究所を去り、あらたに北里研究所をつくる時の貴重な資金になった)。

養生園のほかに同研究所は、さらに私立衛生会から痘苗製造所と血清薬院の運営も任されることになった。痘苗製造所というのは免疫力の強い牛痘漿を量産していた所で、麻布富士見町一番地にあった。また血清薬院の方は、こ

の研究所で成功したジフテリア免疫血清の製造技術を生かしたもので、庁舎は芝区芝公園五号一番地（現在の日赤本社の所）に、動物採血場は芝区白金三光町にあった（この白金三光町の土地は養生園に隣接し、6,600坪もあり、やはり福沢が購入、提供したものであった）。この両施設はわが国最大の予防治療剤（血清と痘苗）製造所であり、その収入は莫大であった。

私立伝染病研究所の国立移管と北里研究所の独立

私立伝染病研究所にたいする国庫補助（3ケ年）は1895年で切れるため、改めて継続3ケ年の国庫補助の申請が第八回帝国議会で提出され、異議なく可決された（1895）。

議会からはこの研究所に選抜研究生制度なる講習会を設けるよう要請が

あった。この講習会によって各都道府県の衛生技術官の養成や伝染病にたいする医師、衛生技術者の再教育を行うことになった。このことは公衆衛生学的な意味で地方の医療に大きな貢献をしたばかりでなく、また北里の名声を高め、その影響力を大きく拡大することにもなった。



後藤新平（1857-1929）

明治大正期の政治家。1891年（明治24年）内務省衛生局長。1898年台湾総督府民政局長。後に民政長官。1906年満鉄の初代総裁、のち逓信相、内相、外相を歴任。1920年東京市長。関東大震災後の東京の復興に尽力。日頃の発言から大風呂敷といわれた。

内務省移管

こうして私立伝染病研究所が軌道にのり充実されつつあったとき、長与の後任衛生局長・後藤新平から、とつじょ痘苗製造所と血清薬院を国営（内務省所管）に移したい旨通達された（1896年（明治29年）3月）。表向きの理由は、血清や痘苗を民間業者に粗製乱造させないためということであった。

この移管には北里も内々同意していたようであった。北里がなぜこれに同意したのかはよく分からない。とくに血清薬院でつくるジフテリア血清は、この私立伝染病研究所で開発したものであり、発足後間もない当研究所にとってはドル箱であり(初年度収益100,000円、純益約30,000円)、純益だけでも毎年の国庫補助の倍にあたる金額である。いかに後藤の要請とはいえ、何のもくろみなしに北里がこれを手放す筈はないであろう。大きい収益のあった両施設を北里はなぜ手放したのか、さらに伝染病研究所で開発したジフテリア血清までもなぜ北里が手放したのか、北里と後藤の間にどのような話し合いがあったのか、興味深い問題であるが今となっては知るよしもない。

後藤はもともと伝染病研究所そのものもゆくゆくは国立(内務省)に移行すべきであると考えていたらしい。すでに国立にした血清薬院と痘苗製造所からあがる収益で伝染病研究所の運営は十分可能であると踏んでいたようである。北里もまた内々そのことを了承していたのかも知れない。北里の場合にはさらに、今後ますますばく大な研究費を必要とする伝染病研究をすすめるには、僅かの政府補助金を仰ぐよりも、内務省に入り込み、その中で自由に工作する方が、よほど研究費を得やすいと考えたのかも知れない。

後藤の後任衛生局長・長谷川泰は1899年(明治32年)3月、ついに私立伝染病研究所を国立(内務省)に移管することを打ち出した。内務大臣は私立衛生会伝染病研究所の施設、備品類一切を無償で国に寄付し、所員はそのまま官吏となし、事業を国営にする旨通達した。こうして伝染病研究所は6年4ヶ月にわたる私立時代を終え、4月1日から国立の研究所、つまり内務省伝染病研究所に改組されることになった。



長谷川泰 (1842-1912)

明治期の医学教育者。佐藤尚中に師事。長崎医学学校校長を経て、1876年医学学校・済生学舎を設立、9,600余人の医師を養成。1890年(明治23年)衆議院議員、1898年内務省衛生局長。

長与専齋はもちろんこの伝染病研究所の国立（内務省）移管に反対であった。長与が会長をつとめる中央衛生会は長谷川を厳しく非難した。長与が主張していた「治療研究を私立の病院に引き受けさせ、国立の大学と競走できるほど充実させて、全国の医学を推進させたい」という理想からみると、後藤、長谷川の政治的行動はこの理想をかなり後退させたように思われた。

長与が副会頭をつとめる私立衛生会もこの内務省移管には強く反対であった。同会理事の柳下士興は「すでに伝染病研究所は私立衛生会の立派な事業である。たとえ政府であろうと公益団体のものを強奪に等しいやり方で無償で寄付させるのは私立衛生会に対する明確な侮辱であり圧政である」と断じた。

福沢諭吉もこの移管には批判的で、後藤に対して「もし後年、北里を罷免して別の者がやることになったら、どうするのだ」と詰問している。そして相談にきた北里には「政府も人である以上、今日の方針が永久に踏襲されるものとも思えない。足元の明るいうちに、万一の際独立独行のできるよう用意をして置くことが肝要だ」と忠告している（北里はこの福沢の忠告に従って養生園を残した。そして後年、東京大学移管の時にはこの養生園の収入によって救われることになる）。

大阪府立医学校（現阪大医学部）校長の佐多愛彦（鹿児島医学校出身、高木兼寛の後輩）もこれに反対で「この内務省移管は北里（博士）およびその事業の一大失態なり」と断じた。彼はかつてこの研究所の選抜研究生であった。

このような多くの批判にもかかわらず、政府は内務省移管を強行した。そして同研究所は6年後(1905)、国営の血清薬院、痘苗製造所を合併して、芝区白金台町の19,000坪の広大な土地に移転し、建坪3,300坪の堂々たる内務省伝染病研究所に変身した。その規模と設備はまさに Koch 研究所や Pasteur 研究所に並ぶ世界三大研究所の一つと称せられた。こうして「芝愛宕町の伝染病研究所」は終わった。私立、国立(内務省)を含めて、明治27年(1894)2月から11年9ヶ月の寿命であった。

内務省伝染病研究所は、血清薬院、痘苗製造所を合併したことで、診療、研究のみならず、わが国最大の予防治療剤の製造所にもなった。製造物品のな

かで毎年大量需要があったのはいうまでもなくジフテリア血清と痘苗であった。全収益（13-24万円）の8割を占め、診療収益をはるかに上回った。

この他にこの研究所の重要な仕事に、私立時代から続けてきた細菌学、伝染病学についての講習会があった。全国から集った多くの講習生（医師、獣医師ら）に実際的な研修を施し、わが国の衛生学の普及と防疫技術の向上のために大きな役割を果たした。このことは、東京大学を中心に医学教育の一元化をもくろみ、この大学を権威の頂点に置きたい大学派にとっては苦々しいことであった。

Kochは1901年、新ツベルクリンを発表したが、北里もその新ツベルクリンの臨床実験を大いに推進した。結核病院・養生園は、そのために来院する患者も多く、増築を重ねることになった。そして同病院の大きい収益にも繋がった。大阪府立医学校でも、1902年から肺病料を設け、大学に昇格するときには寄付を得て、竹尾結核研究所に発展した。学長・佐多愛彦の見識であった。東京大学では元来、結核の予防や治療には消極的で（大学でやることにはむしろ批判的で）、ここではむしろ病原病理を純粹に追求する大学アカデミズムが主流であった。

文部省・東京大学移管

かつて佐多愛彦が喝破したごとく伝染病研究所の内務省移管は実に「北里（博士）および事業の一大失態」であった。間もなく同研究所は文部省（東京大学）に移管されることになるのである。1914年（大正3年）10月14日、大隈重信内閣は「文政統一、行政整理」の名目で、所長・北里に何の相談もなく（抜き打ち的に）、内務省伝染病研究所を文部省（東京大学）に移管する旨通達した。そして必然的帰結のように医科大学長（東大医学部長）青山胤通が所長に就任した（長谷川泰は内務省衛生局長をすでに（1902）辞任していた）。

福沢がかつて「政府ノ意見ナルモノハ何時変更ヲ見ルヤモ知ルベカラズ」と云って懸念したことが現実になってしまったのである（福沢はすでにこの世を去っていた）。内務省移管は文部省・東京大学移管への準備だったのである。

北里はこの時「大学の青山が大隈を動かせるなり」「青山からこういう仕打

ちを受けるとは信じられない」と口走ったというが、世論も北里に同情し、「大学派の北里追い出し、伝研乗っ取り」といって盛んに政府を糾弾した。

私立衛生会（会頭・土方久元伯爵）も、總會の名において「政府がその所管を内務省より文部省にうつしたるは、本私立衛生会が同所を設立して、これを内務省に寄附したる目的に背反す」と決議して、この移管に抗議した（この時、副会頭・長与専斎はすでに世を去っていた）。

このような強い批判にもかかわらず移管は強行された。1914年10月19日、北里は憤然として辞表を提出し、同研究所を去った。翌20日には、北島多一、志賀潔、秦佐八郎、梅野信吉、宮嶋幹之助、照内豊、草間滋ら幹部所員すべてがこれに続いた。世論はいやが上にも沸騰した。

北里は辞表を提出したあと私立衛生会会頭に書状をおくり、研究所創立



金杉英五郎 (1865-1942)

町医者 of the 巨頭といわれる。1888年(明治21年)東京医科大学(現東大医学部)別課卒、直ちにドイツに留学、帰朝後、本邦最初の耳鼻咽喉科学講座を慈恵に開講。1894年から永く大日本私立衛生会の役員をつとめる。1910年東京医師会長。1922年(大正11年)慈恵医大学長兼教授。

の同会の無私 of the 援助に感謝しつつ苦衷を次のように述べた。「文部大臣によると同研究所はこれを東京大学に隷属せしめ、その内部を同大学の組織に完全に変更せしめる予定なるが如し。これ実に不肖が多年支持し来りたる研究方針を根底より破壊するものにして、不肖の堪え得べき所にあらず」と。

ここにいう多年支持し来りたる研究方針とは、治療研究に際して基礎研究と臨床研究とを結合させて進める彼の方法論であることは云うまでもない。大学アカデミズムには、元来この治療研究という考え方はなく、以前から「研究は東京大学でやればよい、血清、痘苗は民間で造らせればよい。治療研究は不要である」というのがいつも底流にある思想であった。

北里の書簡をうけた私立衛生会 of the 理事

長・金杉英五郎(1865-1942、慈恵医大初代学長)は、大隈首相(内務大臣兼務)に次のような詰問状を提出した。

- 第一 内務大臣閣下はわが大日本私立衛生会と伝染病研究所との歴史的関係を知らざるか
 - 第二 内務大臣閣下は如上の関係を知るも之れを無視するか
 - 第三 内務大臣閣下は私立の公益団体杯は一顧の価値なきものとの趣意なるか
- 大隈からはこれに対する誠実な答えは得られなかった。

北里研究所の独立

北里は福沢のすすめで蓄えてきた養生園の収入と、森村市左衛門ら財界からの援助と、さらに世間からの同情による義捐金によって、新しい研究所・北里研究所を設立した。この研究所は養生園に隣接する芝区白金三光町の地に、総工費20余万円、満1年を費やして1915年(大正4年)11月に完成した。

あ と が き

伝染病研究所の東京大学移管はわが国医学界の大事件であった。これを契機に北里派と大学派との確執は一層激しく永く続くことになった。

金杉英五郎はこの事件の本質を「ひっきょう大学派が北里の事業を嫉視する処から起こった卑劣極まる陰謀なり」と断じた。たしかに伝染病研究所は、東京大学の研究室に較べて、あまりにも大きく、設備もはるかに立派であった。しかも北里はすでに内務省においては名うての実力者であり「長谷川衛生局長は北里の傀儡のみ、衛生局は内務省にあり、而して局長は愛宕町(伝染病研究所所在地)にあり」とまでいわれるほどになっていた。大学派からみれば、さらに府県の衛生課長を通じ、あるいは研究所の講習会を通じて、全国の医師を北里のまわりに結集するようにさえ見えたのであろう。医育、研究の一元化を目ざし、その頂点を一つに絞りたい東京大学にしてみれば我慢

のできないことだったのかも知れない。

北里は、成功を急ぐあまり後藤、長谷川に担がれて内務省移管には同意したものの、さらに移管が東京大学にまで続くとは思っておよばなかったであろう。福沢の言にしたがって独立自営主義（私立伝染病研究所）を守っていれば、いかに政府といえども権力で東京大学移管を強行したりすることはできなかった筈である。

何れにしる内務省移管を契機に、やっと芽生えた民衆のための医学（私立衛生会が主導し、私立伝染病研究所に結実した治療研究の医学）はこうして大きなダメージを受けることになった。北里、後藤、長谷川らは、学界での功名や政官界での駆け引きに忙しく、伝染病に苦しむ民衆に身を置く立場を忘れかけたのではないだろうか。福沢、長与の視点からみると、彼らの視点はやはり次元低かったように思われる。

その後、二つの研究所はどうなったのであろうか。

東京大学伝染病研究所は、国から与えられる豊富な研究費と学問研究の自由という特権を背景に大きく発展した。そして現在の東京大学医科学研究所に続くのである。一方、純然たる私立研究所にもどった北里研究所は、貧しいながら本来の実用性にその存在意義を示しながら、よく精励した。ここでいう実用性とは云うまでもなく治療血清の製造研究のことであり、これによって研究費を稼ぎながら、よく学会で東京大学伝染病研究所と競い合った。

ここでこの血清製造の力量を評価する意味で、両研究所のジフテリア血清の製造量を比較してみた。図3は、我が国の全製造量（上）と、それに対する二つの研究所の製造パーセント（下）を経時的に示したものである。大雑把にいつて1930-31年（昭和5-6年）ころから陸軍の後押しもあり東京大学は北里研究所を抜き（偶然であろうが昭和6年に北里は逝去している）、その差は次第に大きくなり、1942年頃になると7倍にまで広がるのである。このように相対的に小さくなった北里研究所は、戦後はさらに医療体制の変化にともなって、研究所員を希望する新卒医学士がほとんどいなくなるまでに停滞するのである（同研究所が北里大学、とくにその医学部を設立した理由はそこにあったといわれる）。

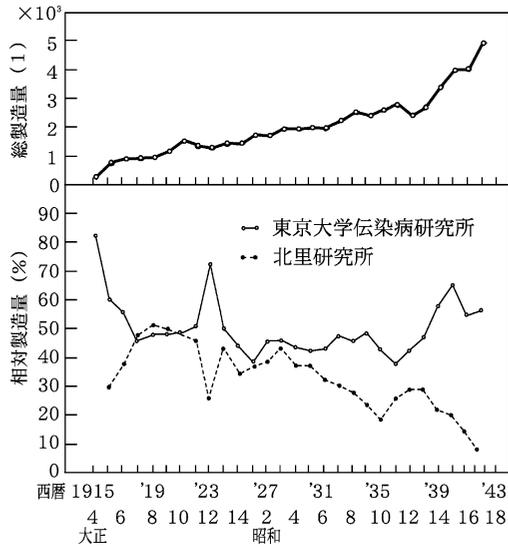


図3. 東京大学伝染病研究所と北里研究所のジフテリア血清製造量
 上は日本全体の総製造量 (1), 下は両研究所の製造量 (%)

(そういえば思い出す話がある) 東北大学の正宗一(医化学教授)が親友である上代皓三(日本医科大学学生化学教授)を、戦後困窮していた日本医科大学(私立)に訪ねたときの話である(上代皓三の回想文)。「正宗君は、窓からはるかに見える東京大学・応用微生物研究所の新しい壮大な建物をながめながら『ここに来ると、税金の威力というものが実によく分かるなあ』と感にたえない口振りで話した」というのである。

とにかく筆者の仮定であるが、もし北里が、福沢、長与、森村および私立衛生会によって有志共立的につくられた私立伝染病研究所で、焦らずに、病者の苦痛を思い、そのための治療研究を地道に続けていれば、日本にもフランスの Pasteur 研究所にも劣らない個性的で立派な治療研究所ができたのではないかと思うのである。質の高い優れた研究業績はほとんど私立伝染病研究所時代に出されていたのである。

主要参考図書

- 1) 東京大学医学部百年史編集委員会. 東京大学医学部百年史. 東京: 東京大学出版会, 1967.
- 2) 小高 健. 伝染病研究所: 近代医学開拓の道のり. 東京: 学会出版センター, 1992.
- 3) 神谷昭典. 日本近代医学の定立. 医療図書出版, 1984.
- 4) 宗田 一. 日本医療文化史. 思文閣出版, 1989.
- 5) 小川鼎三, 酒井シヅ (校注). 松本順自伝・長与専斎自伝, 平凡社, 1980.
- 6) 伴 忠康. 適塾と長与専斎—衛生学と松香私志—. 創元社, 1987.
- 7) 松田 誠. 高木兼寛伝—脚気をなくした男—. 講談社, 1990.
- 8) 宮島幹之助. 北里柴三郎伝. 北里研究所, 1932.
- 9) 梅沢彦太郎編. 近世名医一夕話. 日本医事新報社, 1937.
- 10) 北島多一. 北島多一自伝. 北島先生記念事業会, 1955.
- 11) 飯田 鼎, 福沢諭吉. 中央公論社, 1984.
- 12) 秦 藤樹 (代). 北里研究所五十年誌. 北里研究所, 1966.
- 13) 北岡伸一. 後藤新平. 中央公論社, 1988.
- 14) 西山信光. 極到余音. 金杉博士彰功会, 1935.
- 15) 長木大三. 北里大学十年史. 北里学園, 1973.
- 16) 北里学園記念誌編纂部会. 北里学園二十五年史. 北里学園, 1989.